大学生用自己分化度尺度の再検査信頼性および妥当性の検討

工藤 浩二

(東京学芸大学教育学部)

キーワード: 自己分化度, 再検査信頼性, 併存的妥当性

A study of test-retest reliability and concurrent validity of differentiation of self scale for university students

Koji KUDO

(Faculty of Education, Tokyo Gakugei Univ.)

Key Words: differentiation of self, test-retest reliability, concurrent validity

目 的

自己分化度(differentiation of self)とは, Bowen が提唱した概念の1つであり, 関係性における分化度および個人内界における分化度の2つの次元からなるものである。自己分化度が高い者は, この2つの領域における対概念間のバランスを維持し, 全体的統合を保ちながら, それぞれを適切に機能させることができる。一方, 自己分化度が低い者は, 特にストレスフルな状況になると, 他者との融合が高まり, また, 思考が情動に圧倒され, 容易に機能不全に陥るとされている(Bowen, 1978; Kerr & Bowen, 1988)。

この自己分化度に関する実証的研究は, 国外においては年々蓄積されているものの, 国外においては皆無に近い状況が続いている。その理由の一端は国内における自己分化度尺度の開発の遅れにあるとして, 工藤(2015)は大学生を対象として自己分化度尺度の作成を試みている。その結果, 3下位尺度(計21項目)からなる尺度を作成し, その信頼性と妥当性について報告している。しかし, それは内的整合性である信頼性係数および1つの基準(特性不安)との相関による併存的妥当性の報告に留まっている。また, 尺度の再検査信頼性についてはまだ検討されていない。よって, 本研究ではこれらの点について検討することとする。

方 法

被調査者と調査時期 関東の大学生を対象とした。本調査は再検査信頼性の検討を含むため, 2015年1月から2月にかけて3週間のインターバルを空けて2回の調査を実施した(1回目をT1, 2回目をT2とする)。再検査信頼性の検討に関する有効回答数は $n=62$ (男子20, 女子42)であり, 平均年齢(T1時)は20.50歳($SD=0.72$)であった。妥当性の検討に関する有効回答数は $n=121$ (男子45, 女子76)であり, 平均年齢(T2時)は20.81歳($SD=0.92$)であった。

質問紙構成 T1においては, 再検査信頼性の検討を目的として, 大学生用自己分化度尺度(工藤, 2015)を利用した。これは, 「他律的他者傾倒」, 「感情優位性」, 「自律的目標指向」の3下位尺度からなる。T2においては, さらに併存的妥当性の検討を目的に加え, 大学生用自己分化度尺度(工藤, 2015)の他に, 自己分化度の近接概念として「本来感」(sense of authenticity)および「愛着」を取り上げ, それぞれを測定する尺度として, 本来感尺度(伊藤・小玉, 2005)およびECR-GO(中尾・加藤, 2004)を利用した。本来感尺度は単一尺度(計7項目)であり, ECR-GOは「見捨てられ不安」および「親密性の回避」の2下位尺度からなる(計36項目)。ただし, ECR-GOについては, 見捨てられ不安尺度のみを用いることとし, 中尾・加藤(2004)の分析において当該因子への負荷量が高い10項目を利用した。

結 果

再検査信頼性の検討 T1およびT2における相関係数は, 他律的他者傾倒尺度が $r=.81(p<.01)$, 感情優位性尺度が r

$=.83(p<.01)$, 自律的目標指向尺度が $r=.77(p<.01)$ であった。全ての下位尺度において強い正の相関があった。

妥当性の検討 各尺度得点間の相関係数はTable 1に示したようになった。他律的他者傾倒尺度および感情優位性尺度は, 本来感尺度と中程度の正の相関, 見捨てられ不安尺度と中程度の負の相関があった。自律的目標指向尺度は, 本来感尺度と中程度の正の相関, 見捨てられ不安尺度とは負の弱い相関があった。

Table 1

	1	2	3	4	5
1. 他律的他者傾倒	—				
2. 感情優位性	.45**	—			
3. 自律的目標指向	.23*	.27**	—		
4. 本来感	.51**	.42**	.58**	—	
5. 見捨てられ不安	-.61**	-.54**	-.25**	-.51**	—

** $p<.01$, * $p<.05$, $n=121$

考 察

いずれの下位尺度についてもT1およびT2における尺度得点には強い正の相関があり, 大学生用自己分化度尺度の時間的安定性すなわち再検査信頼性が確認された。

また, 本来感尺度および見捨てられ不安尺度との関連において, いずれの下位尺度についても予想される符号で概ね中程度の相関がみられ, 併存的妥当性が示された。

しかし, 自律的目標指向尺度については, 見捨てられ不安尺度との相関が弱かった。他の2下位尺度の項目内容は自己分化度の2つの次元に直接的に対応するものといえるが, 自律的目標指向尺度の項目内容は, 自己分化度の2つの次元の分化度の高さによって達成される自己分化度の高い者の姿を描写するものといえる。この差異が本研究の結果に何らかの影響を及ぼしている可能性がある。自律的目標指向尺度が他の2下位尺度と異なる側面を有することは, 自律的目標指向尺度と他の2下位尺度との相関が弱いことから示唆される。今後, 精緻な検討を加える必要があるだろう。

引用文献

- Bowen, M. (1978). *Family therapy in clinical practice*. New York: Jason Aronson.
- 伊藤 正哉・小玉 正博 (2005). 自分らしくある感覚(本来感)と自尊感情がwell-beingに及ぼす影響の検討 教育心理学研究, 53, 74-85.
- Kerr, M. E., & Bowen, M. (1988). *Family evaluation*. New York: Norton.
- 工藤 浩二 (2015). 大学生用自己分化度尺度の作成および信頼性と妥当性の基礎的検討 日本パーソナリティ心理学会第24回発表論文集.
- 中尾 達馬・加藤 和生 (2004). “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学研究, 5, 19-27.